

●北方対策担当大臣賞●

つながる思い・つなげる思い

にし はるか
西 悠伽

唐津市立加唐中学校2年(佐賀県)

「悠伽、ありがとう」叔母は涙を流してそう言いました。私は昨年、「北方領土に関する全国スピーチコンテスト」でスピーチをする機会をいただきました。その中で、私は亡くなった曾祖父のことを話しました。曾祖父は、もともと沖縄県の出身で、戦時中、ビルマに出兵していました。終戦後、沖縄はアメリカの統治下にあったため、沖縄に帰ることができず、佐賀県の加唐島にきました。

私は、スピーチできたことを、曾祖父に伝えたいと思い、曾祖父の位牌がある祖母の姉の家に行きました。そこで、スピーチを仏壇の中の曾祖父に聞いてもらいました。叔母はその傍らで、一緒に聞いてくれました。その後、叔母は一言、「悠伽ありがとう」と涙を流しながら言ってくれました。その涙を見て、「ハッと」しました。私にとっては遠い昔のことでも、叔母にとっては自分の父親のこと。曾祖父にとっては自分自身のこと。経験したことは、その人にとっては一生忘れられない現実なのです。

これは、北方領土問題も同じことだと思います。1945年のあの日、北方領土の四島が不法に占拠され、そこに住んでいた日本人が強制的に故郷を追われたのです。そして、70年以上たつ今も、故郷の島に帰ることができていません。

北方領土問題について調べてみると、四島返還論や二島譲渡論、三島返還論、共同統治論、面積2等分論など、様々な解決策が考えられていること。また「ビザなし交流」など、ロシアの方々と交流する場が用意されていることも知りました。

北方領土問題に関して大切なのは、元島民の方々と、今、北方領土に住んでいるロシアの方々の、両方の「思い」ではないでしょうか。強制的に故郷を追われた元島民の方々は、今でも故郷に帰ることができず、苦しんでいるのです。そして、島に帰れる日が来ることを祈っています。

「70年以上前の昔のこと」ではありません。今も続く、現実なのです。

そして、北方領土に住んでいるロシアの方々にとっても、大切な島、大好きな故郷です。だから北方領土から移住させてしまうと、元島民の方々と同じように苦しむ人を増やすだけです。

今、私にできること。それは、北方領土問題について、正しく理解し、それを次の世代につなげていくことです。もし、小学生たちが領土問題について知り、考えることができたなら、新しいアイデアがたくさん出てきて、北方領土問題解決へとつながる一歩になるかもしれません。

実は私の学校は、小中併設校です。毎日、小学生と関わる機会があります。そこで私は、小学生に集まってもらい、北方領土の位置や領土問題について説明をしました。小学生たちはとても興味を持って聞いてくれました。そして、児童のみんなにどう思うか考えてもらいました。また、今年の文化祭では、領土問題をテーマにした劇のシナリオをつくり、全校劇に取り組みました。小学生から大人まで領土問題を考えるきっかけとなるよう、『島に住んでいる人々』と『鬼たち』が、ひとつの島を奪い合うが、最後はお互いの、島への「思い」を認め合い、その島で共に生きるというユーモアも交えた内容にしました。今後も、北方領土問題を考えるための絵本などを作り、読み聞かせなどもしたいと考えています。

この島に生まれた私たちだからこわかる「思い」を、これからも様々な形でつないでいきます。

北方領土問題が、元島民の方々と、今北方領土に住んでいるロシアの方々も、どちらもが納得できる解決策で解決してほしいと願っています。そして、私はその日が来るまで私にできることをやり続けます。